琉游舎

アトリエ琉游舎だより 170号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2024年1月17日発行

寒垢離に せなかの竜の披露かな 一茶

●暖冬と予想されていたこの冬も、寒中に入って朝晩の冷え込みも例年通りの厳しさとなりました。冬は冬らしく朝のキーンっと冷え切った空気の中を歩くと、心身が引き締まります。
●寒垢離は寒中に冷水を浴び心身を清めて、神仏に祈願することです。新春の寺や神社の行事でテレビでも目にすることがあるでしょう。一茶の句はどこかの神社仏閣で目にした光景でしょうか、威勢のいいかけ声や祈願文の声と共に背中の竜の刺青を流れ落ちる滝のような水勢を書き留めた句のようです。江戸時代には背中に竜の刺青を彫っている人が多かったのでしょか、竜を背中にしょって誇らしげに寒垢離をしている光景が映像として現れてきます。
●現在では温泉や銭湯でも彫り物のある人は入場お断り、公共の場で刺青を披露することは反社会的な行為と断じられています。日本では反社会的な組織に属する人たちが好んで刺青をしたためですが、世界的に見ると古代から刺青は（タトゥー）は身分・所属などを示す個体識別の手段や刑罰、ファッション・美容、医療用途などでも使われていたようです。
●今年は辰年、辰は竜（龍）のことです。東洋では権力・隆盛の象徴として親しまれていました。竜のように勢いのある年になれば良いのですが、今年は早々に災害が発生し、亡くなられる著名人も多く、裏金問題は政治刷新本部の構成メンバーを見ても相変わらずインチキをしていた人たちがどうやってバレないようにその利権を確保するかがミエミエで、また茶番劇を見せられる私たちは、政治家に対するあきらめと嫌悪だけが増すだけのことでしょう。
●「寒垢離にせなかの竜の披露かな」。この句の彫り物に関する評価は時代性や歴史的経緯もあるのでいたしません。ただこの句から感じる躍動感や勢いを私は大切にしたいと思います。竜のごとく力感みなぎる一年であるために、琉游舎は今できる歩みを進めて行きます。

1月・2月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			18 映画会 13時半から	19	20	21
22	23 読書会 13時半から	24	25 映画会 13時半から	26	27	28
29	30	31	2月1日 映画会 お休み	2	3	4
5	6	7	8 映画会 お休み	9	10	11
12	13 読書会 13時半から	14	15 映画会 13時半から	16	17	18

読書会
1月23日
2月13日
（火）13時半

写経会
2月はお休み
と致します

映画会
1月18・25日
2月15日
（木）13時半

狂言綺語…輪廻

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

今冬のコリーナの蓮池でくつろぐ鴨は例年にもまして多く百羽は下らず、12月中は散歩のたびに足を止めて飽きもせず眺めていたものでした。暖かい日が続き、いつもならうっすらと表面に張る氷も無く、鴨にとっては心地よく過ごせる場所だったようです。ところが年が明けて例年の朝晩の冷え込みが襲い氷が張り始めると、いつの間にかあれほどいた鴨たちが、今は十羽ほどの群れが氷のないわずかな場所に固まって身を寄せ合うだけです。たくさんの鴨の姿が当たり前だった日々も、気候が例年に戻るといつもと同じ冬の蓮池の佇まい。つくづく私たちは自然の流れと共に生かされ順応していることを知る鴨の冬ごもりです。

「衆生」は一切の生きとし生けるもののことです。仏教では全ての衆生には仏性が備わっていると説きます。全ての生き物は人間に限らず仏になることができると言うことです。また輪廻の考えから見れば、私たち人間は鴨にも犬にも生まれ変わることがあり得るのです。つまり私が毎日のように眺めている蓮池の鴨は私の来世の姿でもあるのです。これを非科学的や､俗信であると断じることは簡単です。私自身も自分の過去世の姿がなんであり、未来世に何に生まれ変わってくるかなどと考えたことはありませんし、その心配もしていません。人間の姿であるときに善行を積まないと馬や牛に生まれ変わって人間にこき使われるかも知れないとか、蟻となって踏みつぶされるかも知れないと恐れることもありません。現代では生まれ変わりの思想は道徳的な躾に基づいて語られるか、過去世や祖先の行為が現在の不幸をもたらすという言説と組み合わされて宗教権力が民衆をコントロールし富を収奪するための詐言として利用されているかのどちらかでしょう。だから現代では輪廻思想が俗信として捨てられることはいたしかたないことなのです。それでも輪廻観が私たち東洋人の記憶の中に深く刻み込まれて現代まで伝えられていることは重い事実です。それは私たちの自然観や衆生内の人間と他者との関係性を輪廻が無意識のうちに規定しているからだと私は考えます。

人間は物理的な「生」を生きるためには他の衆生を殺しその命を頂いて食べていかなければなりません。また衆生の中で生き抜くためには自己（人間）を害する他者（自然）を駆逐し、あるいは人間を利するために飼い慣らし使役することで生を繋いできました。これは人間が他の衆生を支配する関係です。支配には自己と他者、主・客の関係性が根底にあります。この関係が継続され、それが主客転倒をもたらさない限り、支配の関係性を維持し続けることができるでしょう。しかしその関係性が崩れる恐れがあると､人間は他者の殲滅に向かいます。一方、支配の関係性を維持する事が必要とされれば保護の考え方が生まれます。殲滅と保護は支配を基盤として表裏一体の関係にあるのです。ところが私たちのいのちに輪廻の思想が作用するとそこには支配の思想は存在しなくなるのです。なぜならばその自己はまた他者でもあるからです。つまり生きるために鴨（他者）を捕らえて食べることは輪廻によって鴨に生まれ変わった前世の私を頂いていることかも知れないのです。物理的生を生きるために頂いたいのちは、また誰かの生を繋ぐために与えるいのちなのです。私が頂いたいのちはまた私以外の誰か（衆生）に与えられるいのちです。他者のいのちを自己の中に頂き、そのいのちを他者に与えることは、他者（鴨）は自己（来世の私）でも在るということです。輪廻観は自己と他者が同一のいのちであることを知る思想です。自他一如です。他者のいのちを頂くことは他者の仏性を私のいのちの中に頂き合一すると言うこと、仏の道を歩むことは他者のいのち（仏性）を頂き永遠のいのちとして他者にそれを与えて繋いで行くことです。たとえそれが他者の物理的な生を奪う結果になるとしても、支配の関係によって生まれたものではなく、いのちを繋ぐ（仏性を頂く）輪廻の考え方が根底にあるのです。支配ではなく他者との共棲（合一）の思想です。ですから東洋人には不殺生戒（生き物を故意に殺してはならない）があり、いのちを頂いたときの供養があり、慈しみがあり、感謝があるのです。

人間と衆生あるいは自然を「自己と他者」「主と客」の二項関係と見たとき、それは支配と保護の行為を生み出すことは既に述べました。しかし私たち東洋人とくに八百万の神と輪廻や仏教の考え方が習合した「信」のあり方の中で千五百年以上いのちを繋いできた日本人には、どうしても支配と保護の考え方に馴染めないところが在るのではないでしょうか。コリーナの蓮池で鴨たちの自然の流れのまま（ありのまま）に生きる姿に、私自身の何もなく何も望むことのない日々を重ね合わせて飽くことなく眺める時を過ごした後に家に戻り、テレビやネットで知るニュースは私たちはもはや日本人なのだろうかという不安を引き起こします。年初に起きた旅客機と海上保安庁機の衝突でペットが機体と共に焼失し助けられなかったことに対して、ネット上ではなぜ家族同然のペットが乗客と一緒に客室に乗ることができないで、荷物と一緒に貨物庫に入れられなければならないのか、航空会社に改善を求めるとの意見が飛び交っていました。かと思えばニュースでは繁殖犬がお役御免になったあと、面倒を見るためのコストが嵩み老後の扱いに困っている映像と共に、繁殖犬が生んだ子犬たちが専用の競り場でオークションにかけられている映像が流れていました。オークションで競り落とされた子犬を買った人はそれを家族同然と語りますが、それを産んだ繁殖犬は経済論理によって子犬を産まされ、そして用なしとなっていくのです。そこには慈愛も尊敬も感謝もありません。あるのは「かわいそうだから対策を講じなければ」との支配と保護の論理があるだけです。また南北朝時代から続く農作物の作柄を占う神社の「上げ馬神事」で最後の急坂で馬が骨折し殺処分になったことに対し動物虐待との批判が殺到し、神事の変更を余儀なくされたとのことです。以上の3つの最近の出来事に対して私はこれ以上コメントを致しません。ただ動物愛護を語る思想が生きとし生けるもの（衆生）との共棲（いのちを繋ぐ）と相反するのではないか、と言うことを考えずにはいられません。